視点

「リスク社会」にどう向き合うか

No199 2005年11月

20世紀は「戦争と革命の世紀」と言われたが、産業の近代化を含めそれまでに無い多くのリスクを生み出した。21世紀に入ってからも社会的なリスクは増大し多様化し複雑化している。人類全体を脅かす危機から、人間社会を根底から突き崩すような危機、環境破壊、自然災害、産業社会の発展段階に伴う様々な危機、生活の周辺で家計や個人を取り巻く危機など枚挙に暇が無い。

この現代社会における「リスク」の構造を分析する学問の分野も広く多くの研究が行われ浅学非才の私などの検証の手に余るが、1986年のチェルノブイリ原子力発電事故を機に出版されたウルリッヒ・ベックの社会学的な接近を主に、限られたいくつかの文献を脳裏におくことを出発点にしながら、「リスク」に対する「協同」や「共済」の役割について考えてみたい。

「リスク」とは何か、どのように分類されどのような課題があるかについては、多くの論がある。私は、「リスク （risk）とは人が何かを行った場合、その行為にともなって起こる危険を意味する」という今田隆俊氏の定義（2002年）がわかりやすい。危険（danger）との関連性は、事故や災害など自己が責任を負いきれないできごとを「危険」、自己の意思決定や責任を伴って起こるのが「リスク」と区分されているようであるが、責任主体が明確でないリスクも多々あり厳密な定義に意味があるか、というのが社会学の分野では一般的のようだ。

社会的なリスクの分類と項目について、3人の整理を表にまとめてみた。

社会的リスクの分類

提唱者	タイプ	具体的リスク
ウルリッヒ・ベックⅠ	産業の発達に伴う危険	民衆の大部分の貧困、資格に伴う危険、健康上の危険
	科学・原子力等生産力の発達の最も新たな段階で生じた危険	放射能、空気、水、食品中の有害物質等
	人間の人生や文化に見られる危険や不確実性	社会階級、家族形態、男女の状況、結婚、親であること(社会的不平等、個人化、大量失業、新たなる貧困)
ウルリッヒ・ベックⅡ	環境的	地球温暖化、生態系の破壊
	科学技術的	遺伝子操作、原子力発電、食品添加物
	社会的	治安の悪化、失業、就業形態の不安定化、核家族化による問題解決の困難さ
エスピン・アンデルセン	普遍的	死、高齢時の身体障害進行
	集団(階層)的	炭鉱夫の炭肺症、母子家庭における低所得による貧困
	ライフコース	非標準的で単線的でないライフコースがもたらすリスク
	世代間	遺伝や疾病、親の生活条件の継承()親の教育、1人親
栗林敦子	身体的	病気・健康、食品安全
	物理環境的	自然災害、住宅、環境、治安
	経済的	家計、資産、債務、収入
	精神的	ストレス(家族変化)、いじめ、人格侵害、
	知識・情報	学力低下、個人情報漏洩、デジタルデバイド

※ウルリッヒ・ベック「危険な社会」1998年1月法政大学出版局、エスピン・アンデルセン「福祉国家の可能性」2001年1月櫻井出版、栗林敦子「リスク社会における「自助努力」「自己責任」」ニッセイ基礎研究所報2004Vol34より筆者作成

何故この3人を取り上げたかについては、ウルリッヒ・ベックが近代化・産業発達の過程に立って正面から理論的な整理を試みていること、エスピン・アンデルセンは、21世紀の福祉国家、福祉レジームの展望にとって社会的リスクが意味するものの整理を行っていること、栗林氏が生活保障サービスとしての保険の領域から定義を試みているという違いによっている。社会経済学の領域に限定しても視点が異なれば分類・定義もこれだけ異なるという意味もある。

ウルリッヒ・ベックの整理としても、一般的にはⅡのような形で行われているが、「危険社会」で整理を試みた真意は、「近代的な工業生産方法の結果生じたものであるという因果関係の確定」を重視しており、Ⅰの方にその本質があるのではないか。「富を生み出す源としてかつて大いに脚光を浴びた原子力や化学や遺伝子工学が予測し得ない発生源」となる。そこには、「絶対的かつ無限定的な否定形が・・つきまとう」という表現に端的に示されている。

エスピン・アンデルセンは、「社会福祉をリスクの観点からみる見方は、保険の伝統にその起源をもつ」とし、この見方は、「リスクの規則性と、人びとのリスクに対する同質性とを高い確率で想定できる」という見方で、「死亡率のような人口学的な課題」を考える上では適切だが、自然災害や経済的リスクのように確率論的なあるいは予測不可能な課題については適切でない、しかも事態はますます画一性から離れており、「リスク論」に偏重することなく、「資源とニーズを重視するアプローチ」をとるべきだとしている。

以上の2人に対して、栗林氏は、生活保障サービスを提供する保険の側から、個人・生活者の生活リスクに限定してアプローチしている。従って、この間の社会として「個人が自らのリスクへ対応するように政策転換が迫られて」おり、自助努力、自己責任としての「家計のリスクマネジメント」が重要とし、リスク意識と消費者の成熟化に対応した生活保障の方向性を求めるべきだとしている。極めて明快な産業論としてのリスク分析の立場に立っていると言えよう。

問題は、私たちがこの「リスク」にどう向き合うかである。私たちが日常生活を送るにせよ、労働組合や地域の活動を行うにせよ、所詮はリスクから逃れることはできない。逆に、リスクにチャレンジしない生活や活動は全く面白くない。逃れられないとすれば、リスクを和らげたり、うまく付き合っていったり、思い切りチャレンジするしか方法は無い。それにしても、リスクを見極め、リスクの性質を知り対応策を考えることはどうしても必要だ。大方のリスクは、個人が向かい合うべき「生活リスク」であるとしても、個人や一部の階層や集団、国家では解決も対応もできないものもある。リスクを管理するにしてもその主体が問題となる。新しい深刻なリスクはほとんど国境の壁を越えるものであるから、国際協力、国際政治の機能発揮を何よりも期待しなければならないし、リスクが社会崩壊に繋がることを避けるためには、国家レベルの対応策としての政治、社会福祉の充実を期待する。ベックは、そこに「不安による連帯」と「サブ政治」という視点を提示した。リスクを作り出すのも「サブ政治」だがこれに対抗するNPO、ボランティア、専門家などの政治的影響力も「サブ政治」であり、その基底には「不安の共有による連帯」があるとする。

私は、このリスクへ対抗する核になる主体は、各級・各層のコミュニティーであり、その推進力は「協同」であると思う。協同組合、社会的企業、労働組合、NPO、ボランティア、専門家などがそれぞれの良さを発揮する中で地域、ネットワークを形成する。その活力あるコミュニティーこそが、社会的リスクに対抗する最大の主体たるべきであると思う。そうした弾力性のあるソフトなコミュニティーの形成こそが、自助を支える「共助」、公助を補完する「共助」の「場」として求められる。そのツールとして、「共済」は極めて有効なもので、計算不能なリスクに対する社会貢献・社会的創造運動と政治的影響力のバランスある運動の再構築が望まれているのではないか。全労済など助け合いの存在意義をもった組織体が、「リスクの分散」を超えた「リスクへの協同のチャレンジ」として、新しい「生活リスク」に見合った商品や活動を提起して欲しいと願っている。（麻布十八番）

参考文献

ウルリッヒ・ベック「危険社会－新しい近代への道」1998年10月法政大学出版局

ウルリッヒ・ベック「世界リスク社会論－テロ、戦争、自然社会」2003年11月平凡社

エスピン・アンデルセン「福祉国家の可能性－改革の戦略と理論的基礎」2001年11月桜井書店

橘木俊詔篇「リスク社会を生きる」2004年12月岩波書店

アンソニー・ギデンズ「暴走する世界－グローバリゼーションは何をどう変えるのか」2001年11月ダイヤモンド社

栗林敦子「リスク社会における「自助努力」「自己責任」」ニッセイ基礎研究所報2004Vol34

今田高俊「リスク社会と再帰的近代」国立社会保障人口問題研究所「海外社会保障研究」2002年vol138

藤村正之「リスク社会をどう考えればよいか」（社）生活経済政策研究所2003年6月号

ＤＩＯ目次に戻る ＤＩＯバックナンバー